

情報共有 (2枚 非管理メモ)

NISA班とプレス班へ

取扱注意

10/23

公開不可

暫定版

13:50 広報班

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 10 月 23 日 (日) 11:00~11:35

場所：東京電力本館 101 会議室

先方：記者約 15 名 (カメラ 3 台)

当方：広報部

配布資料：

・なし

からプラント状況に関して説明。

質疑：

Q. 本日の朝日朝刊において、1~4号機と5, 6号機を連携する電源強化を計画していたとのことだが、事実関係は。

A. 福島第一の電源強化対策として、これまで、非常用DGの専有化や隣接プラントからの電源融通のための連携などを実施してきた。1~4号機と5, 6号機の連携強化工事については、担当者のアイデアとしてあったが、あくまでもアイデアレベルのものであり、書類などにまとめておらず、会社として意思決定したものではない。

また、事故への影響については、今回の津波の被害によって電源盤やモーターが水没していたため、事故の緩和等に大きな効果はなかったと考えている。

Q. 山林に処理後の滞留水を散水しているとのことだが、既に実施しているのか。

A. 実施している。

Q. 今後も実施して行くのか。

A. 状況を見ながら実施していく予定。

Q. 処理した水は周辺環境への放出基準を満たしており、口に含んでも平気と言うことで、園田政務官が水を飲むとの発言をしていたが、東電の社長やNISAも飲むべきではないか。

A. 今回散水している水は、原子炉を冷やすラインに流れている処理水ではない。原子炉の冷却に使用している滞留水については、循環システム内で処理ができています。散水している水は、5, 6号機の滞留水を処理したもので、放射性濃度は告示基準以下であるが、もともと飲料水ではないので、現時点で飲む予定はない。

Q. 福島第一原子力発電所の作業に携わっている作業員の中で過去に3人協力企業の作業員がお亡くなりになっているが、病気と作業の因果関係はあるのか。亡くなられた方は既往歴があったのか。

A. お亡くなりになった方の被ばく線量等から、3人の方の死因と作業との因果関係はないものと当社としては考えている。既往歴があったかどうかについてはプライベートな病気であることから回答は差し控えさせて頂く。

Q. 福島第一原子力発電所1～4号機と5/6号機をタイラインで連結する外部電源強化策について、あくまでアイデアレベルでのものであり、具体的に書類等にまとめたものではないとのことだが、具体的に実施されなかった理由は何か。

A. 1～4号機と5/6号機の間は距離があることから電圧降下やケーブルの引き回し等の技術的な課題があり、実現には至らなかったもの。なお当工事を実施しなくても外部電源については、設計要求を満足した設備となっているとの認識を当時は持っており、当工事はあくまで更なる強化策として検討してきた中でのアイデアのひとつである。

Q. 3月11日の地震発生前時点で柏崎刈羽原子力発電所および福島第二原子力発電所の各号機はタイラインで連結されていたのか。

A. 柏崎刈羽原子力発電所、福島第二原子力発電所ともに各号機タイラインで連結されている。

以上

情報共有 (4枚 非管理メモ)

NISA 班 と フォレスト対応チーム

東京電力株式会社

10/24 10:30 取扱注意
公開不可

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

暫定版

広報班

日時：平成 23 年 10 月 23 日 (日) 18:00~19:05

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 20 名 (カメラ 3 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

原子力運営管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について (第二百十二報)
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における海水中の放射性物質の核種分析の結果について (第二百五報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水に含まれる放射性物質の核種分析の結果について (10 月 22 日採取分)
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果
- ・ 物質の核種分析結果
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

- Q. 福島第一原子力発電所 1~4 号機と 5、6 号機の電源連結について、担当者のアイデアレベルにとどまり、採用に至らなかった理由は、
- A. 福島第一原子力発電所の所内電源設備の強化方策としては、1~4 号機の所内電源系の強化、5/6 号機については 7/8 号機増設時の連携計画があったことに加え、当該のアイデアについては技術的課題もあった事から採用には至っていない。従って、社内の技術資料などにまとめられるまでには至っていない。
- Q. 海水中の放射性物質の核種分析の結果において、5、6 号機放水口から北側に約 30m 地点が上がった事について、どう評価しているのか。
- A. 昨日は海が荒れており、通常よりも波が高い状態であった。また、海水の濁りが確認された事から海中に沈積していた放射性物質の舞い上がりによるものと推定される。今後も継続して監視を行い、状況を注視し、今後の対応等を検討していく。
- Q. 過去にも天候の影響により放射性物質の検出値が上昇した事があったのか。
- A. その通り。

Q. 地震発生時点で福島第二原子力発電所および柏崎刈羽原子力発電所は事故前からタイラインで連携出来ているとのことだが、福島第一原子力発電所は何故実施していなかったのか。

A. 福島第一原子力発電所については、福島第二原子力発電所、柏崎刈羽原子力発電所、と同等の連携がとれていたと考えている。6.9kVの上流側にタイラインがあり、そこから2段階の高圧変圧器にて6.9kVまでに落としているが、これは柏崎刈羽原子力発電所も同じ構成である。福島第一原子力発電所はユニット送電であるが、6.9kVが各号機の電源盤からタイラインにて融通出来るように構成されている。電源盤の下にパワーセンター、480Vモータコントロールセンターがあるが、その一番上流側でタイラインにより連結されている。福島第一原子力発電所の1～4号機は大熊線の1～4Lにて送電しており、タイラインで繋いでいる。福島第一原子力発電所1～4号機については十分な外部電源の信頼性があつたと考えている。なお、外部電源は一般設備であり、冷却材喪失事故等の設計上想定している事故が発生した際には、外部電源がない状態で事故収束できるかどうかを評価している。今回の事故については、4号機の定期検査中の1台と1～3号機のそれぞれ2台のD/Gについては津波が来る前までは稼働していた。

Q. 検討内容を纏めた文書の確認はどの程度実施しているのか。通常、原発の安全対策については原子力本部長まで情報があがるとの認識だが、本件はどうか。

A. 文書の確認については、社内で技術検討した書類を一括して技術検討書として整理している。本件については、福島第一原子力発電所の過去の電源検討書については免震重要棟から持ち出せない事から、写真にて確認した。

安全対策については、技術検討レベルであれば検討書ということで上層部まであがってくる。検討したことはあるということを経験形式にて聞いている。

Q. 6月18日に公表した福島第一原子力発電所の事故対応状況の中のP23に2号機の対応状況が整理されているが、2号機は使用可能なパワーセンターがありそこにケーブルをつないで、高圧電源車を接続していたが、その直後に1号機で水素爆発が発生している。連携工事に伴う電源増設を実施した場合、2号機に電源融通ができたのではないかと。仮に容量の問題があつたとしても電源車の補完的な役割が発揮できたと思うがどうか。

A. 2号機のパワーセンターで使えた電源があつたことは事実である。何に使うのか。モータが被水していた。2号機のパワーセンターからつないで、1号機のホウ酸水注入系を稼働しようとした。結果として、3月12日の15時過ぎに1号機の水素爆発があり、結果として準備していたものが使えなかった。

Q. 以前会見でも質問しているが、作業員のメンタル面の相談件数の増減に関する傾向を把握して対策を検討する部署は東電にあるのか。また、個別の診察内容は公表できないとのことであるが、概要だけでも公表頂けないか。

A. 個別の診察内容については、プライバシーの部分でもあり、回答は差し控えさせて頂きたい。なお、以前いただいた質問については現在確認中。

Q. 10月12日の会見で、企業倫理相談窓口について協力企業に再度周知を行い、J

ビレッジ掲示板にも掲示するとのことであったが、現在はそのような窓口の連絡先は掲示されているのか。

A. 既に掲示されているかどうかについては確認する。

Q. 作業員および元作業員が作業環境の改善案を提案する場合、窓口はどこになるのか。本店やJビレッジの安全推進連絡会で取扱って頂く機会はあるのか。

A. 安全推進連絡会は当社と元請けとで構成している。元請け企業の情報共有の仕組みについては承知していないが、協力企業の方については元請け企業に伝えてもらうべきと考える。元請け企業も作業環境に配慮し、必要に応じて安全推進連絡会に提案してもらうことになると思う。

Q. Jビレッジの掲示物について改善案を提出したい場合はどこに提出すればよいのか。

A. 共通的なものは当社のエコボックスにご連絡いただければと考えている。

Q. 1～4号機と5、6号機の電源連結について、決定までの時系列を教えてください。

A. 担当していた設備所管グループがアイデアレベルで検討していたもので、会社として決定した事実は無い。ただし、元々D/Gは1・2号機と3・4号機にそれぞれ3台ずつしかなかったが、1台ずつ増設を行い、各々を母線のタイラインでつなぐ等の対策を取っている。

Q. D/Gの増設と母線をタイラインでつないだ時期は。

A. 確認する。

Q. 本日は午前中の会見は広報担当にて実施されているが、3階の会見場では実施しないのか。

A. 特段プラント状況に大きな動きが無く、また午前中もプラント状況はお伝えしており、会見を無くしている訳ではない。また何か大きな動きやご報告すべき案件が出てきた場合には会見を実施することになる。なお、これまでの会見でもプラント状況をご説明した上で皆さまからご質問をいただいております、これまでと違うことにはなっていないと考えている。

Q. 散水している5、6号機の滞留水について、周辺環境への放出基準を満たしており、口に含んでも問題無いということで、園田政務官が水を飲むとの発言をしているが、東京電力の方は飲まないのか。

A. 散水している水は、5、6号機の滞留水を処理したもので、放射性濃度は告示基準以下であり、飲料用に蒸留すれば飲んでも問題は無い。仮定の話ではあるが、第三者である政務官が飲むという判断をするのであれば、事故の当事者として飲むことは拒まない。

Q. 現在の5、6号機の発災時のプラント状況は。

A. 地震発生時に既に圧力容器や格納容器の蓋が閉まっていた。比較的早く海水系なども

復帰しており、熱交換によって、冷温停止に持ち込んでいる。

Q. 5, 6号機の燃料はメルトダウンしていなかったのか。

A. その通り。

Q. 5, 6号機の滞留水に1, 3号機の水素爆発で放出された放射性物質が混入していないのか。

A. ほぼ混入して無いと思われる。

Q. 最近亡くなった3人目の作業員の病名は。

A. 後腹膜膿瘍による敗血症性ショックである。

Q. 原子力発電所での作業や被ばくとは関係無いと考えているのか。

A. 直接的な関係は無いと思われる。

熱中症の疑いが発生した件について、 から以下の説明を実施。

本日午前11時40分に2号機タービン建屋東側にて道路整備の作業をしていた協力企業作業員が体調不良を訴えた。17時Jピレッジメディカルセンターにて診療を行い、診察の結果、軽い熱中症と診断された。18時05分に容態が回復し、ご自宅に帰宅されている。今後も作業環境改善を進めるとともに、協力企業も含めて熱中症予防対策呼びかけてまいりたい。

以上